

[成果情報名]カキ「太秋」は陰芽由来結果母枝を多く残すことで翌年の雌花確保ができる

[要約]カキ「太秋」は、陰芽由来の結果母枝が、定芽由来の結果母枝より雌花着生割合が約30%高い。定芽由来の結果母枝の中で、前年雌花のみが着生した結果母枝が、雄花のみが着生した結果母枝より雌花着生割合が高い。

[キーワード]カキ「太秋」、陰芽由来結果母枝、定芽由来結果母枝、雌花着生割合

[担当]熊本県農業研究センター果樹研究所・落葉果樹研究室

[代表連絡先]0964-32-1723

[分類]研究成果情報

[背景・ねらい]

カキ「太秋」では、比較的長い結果母枝で雌花が多く着生する傾向があり、安定して雌花を確保するためには、30cm以上の充実した結果母枝を用いるとされている（熊本県農業研究成果No.150）。しかし、充実した結果母枝においても雌花の着生が少ない年が見られ、減収の原因となっている。そこで、本研究では、結果母枝の発生由来及び前年の雌雄性の違いによる翌年の雌花着生割合を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. カキ「太秋」の結果母枝は、定芽由来と比べて陰芽由来の結果母枝（図1）が長く、雌花が着生した結果母枝の割合が86.3%と約30%高い。また、結果母枝当たりの雌花着生数は、定芽由来のものより陰芽由来の方が極めて高い（表1）。
2. 定芽由来結果母枝の前年の雌雄性の違いは、雌花のみが着生した結果母枝が、雄花が着生した結果母枝（図2）より、雌花が着生した結果母枝の割合が高い（表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. この成果は、カキ「太秋」の生産安定のためのせん定時の雌花確保技術として活用できる。
2. 熊本県農業研究センター果樹研究所のカキ「太秋」樹齢21～23年生を6樹により調査した。
3. 陰芽由来結果母枝は、枝の発生部位にフタモンマダラメイガの幼虫が侵入しやすく、炭そ病も発生しやすいため、粗皮剥ぎや薬剤散布により防除を徹底する。

[具体的データ]



図1 カキ「太秋」の結果母枝発生由来の違い

（左：陰芽由来結果母枝、右：定芽由来結果母枝）



図2 雌花及び雄花の着花痕（左：雌花、右：雄花）

表1 カキ「太秋」の結果母枝の発生由来が雌花の着生に及ぼす影響

処理区	調査本数 (本)	結果母枝 長(cm)	雌花着生 結果母枝 割合(%)	結果母枝当 たり雌花着 生数(個)	結果母枝の雌雄性(%)			
					雌花のみ	雌花優勢	雄花優勢	雄花のみ
定芽由来結果母枝	119	38.9	54.2	6.1	0.0	11.7	42.5	45.9
陰芽由来結果母枝	118	55.3	86.3	14.1	17.1	27.5	41.8	13.7

注1) 結果母枝の雌雄性の、雄花・雌花ともに着生した結果母枝については、雌花の着生した節が、雄花より多い場合、雌花優勢、逆に、雄花が多い場合は、雄花優勢とした。

注2) 結果は、2020年及び2021年2カ年の平均値。

表2 カキ「太秋」の定芽由来結果母枝の前年の雌雄性が当年の雌花着生に及ぼす影響（2020年、2021年）

前年結果母枝の雌雄性	調査本数 (本)	結果母枝 長(cm)	雌花着生 結果母枝 割合(%)	結果母枝の雌雄性(%)			
				雌花のみ	雌花優勢	雄花優勢	雄花のみ
雌花のみ	44	40.3	68.0	0.0	17.1	50.8	32.1
雄花のみ	66	37.9	51.7	0.0	9.3	42.4	48.3

注1) 結果母枝の雌雄性の、雄花・雌花ともに着生した結果母枝については、雌花の着生した節が、雄花より多い場合、雌花優勢、逆に、雄花が多い場合は、雄花優勢とした。

注2) 結果は、2020年及び2021年2カ年の平均値。

(中村健吾)

[その他]

予算区分：県単

研究期間：2020～2021年度

研究担当者：中村健吾、湯田健太、北村光康、藤丸治

発表論文等：

1) 湯田ら（2022）園芸学会九州支部研究集録第30号:p25

2) 2022年度熊本県研究成果情報No.1000

<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/187262.pdf>